

この頃思いつく

戦後六十年が過ぎ、その間時代時代に応じた言葉の「三K」が流行してきたそうです。最初の三Kは「米・国鉄・健康保険」という国の赤字を代表する言葉だったそうです。その後、日本経済が高度成長に転じてくると、若い人たちからは「きつい・汚い・危険」な職場を敬遠する言葉が出てきました。このころはバブル景気で、神武景気等々と言われた物質的には裕福になってきた時代でした。それからバブル崩壊により不景気になると「交際費・交通費・広告宣伝費」を削る「三K」が合い言葉になって、二十一世紀には「国際化・高齢化（少子化）・個別化」という「三K」が主流で現在にいたっております。

ところで、最近ノーベル平和賞受賞のケニア副環境相、ワンガリ・マータイさんが三Kならぬ「三R」を主張して世界にも注目されました。「三R」とは、アフリカの貧困解消や地球温暖化対策のため、資源を有効利用する「ゴミの削減・再利用」の必要性を指摘したものです。そして、この三

Rの基本は、日本語の『もったいない』ということを実践することにあると言っております。

勿体ないという言葉は、昔からよく使われてきた言葉です。「勿体ない」という言葉を広辞苑では、「畏れ多い・かたじけない・ありがたい・むやみに費やすのが惜しい（捨てるは勿体ない）」とあります。茶碗にご飯粒を残すと勿体ないと母親に叱られました。米を

教育随想



さいたま市立上木崎小学校長

渡辺 繁

作った人の苦勞に感謝の思いが宿っている言葉です。物を粗末にしたときや失ったときや、形に表れない感謝の気持ちなど、たくさん意味が含まれております。

半年ほど前のあるテレビ放送で、ノーベル化学賞を受賞した田中耕一さんが、自分の小さいときからの生き方

から次のような話をしていたのを思い出します。『自分が今あるのは、小学校時代に理科の実験の楽しさを教えてくれた先生のおかげです。そして、理科の勉強も含めて、いつも大切にしてください。勿体ないということ捨ててしまうことが勿体ないと考えて、何事にも取り組んできました。勿体ないと立ち止まって考える暇をもつことが大事なことです。』と。このようなことを考えると、子ども潤いプランの心を潤す「元氣なあいさつ・ありがとうの感謝の気持ち・ハイというしっかりした返事・ごめんなさいという素直な気持ち」の言葉なども、勿体ないの気持ちにつながるような気がしてきます。

人や物など私たちのまわりにあるいろいろな関わり合いの中で、気持ちを育てる言葉「勿体ない」を大切にしていきたいものです。物があふれかえる今の世の中では、通用しにくい言葉でもあるかもしれないからこそ、色々な形で伝えていきたいものです。そして、自らも勿体ないと立ち止まって考える暇をいつももちたいものです。

(わたなべ しげる)